

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0826 ◆◆◆

25/02/05

【 2月相場は早くも正念場、前月小動きの反動期待も!? 】

すでに終了している1月のドル/円相場の月間変動はわずかに5.16円(153.72-158.88円)。これは昨年2月以来の小変動だ。

改めて指摘するまでもなく、1月20日に「トランプ新米大統領」が誕生。そして、即座にWHOからの脱退を表明したり、いわゆる「トランプ関税」と言われる貿易戦争を予感させたりする動きなどが観測されたものの、結果として為替市場への影響はそれほど大きくなかったことになる。果たして、足もとの2月相場は再び「大相場」へと戻るのか、それとも「2ヵ月連続小動き」となるのか早くも正念場だ。今年一年の動きを占う重要な1ヵ月になるイメージも悪くはない。

◎パターンからすると今年2月は「大変動」!?

当レポートでは、恒例となっている過去の経験則をもとにした足もと2月の月間見通しを取り上げるが、特徴について指摘する前に、まずは勝敗・星取表をみておきたい。1990年以降昨年まで過去35年はというと、17勝18敗だった。ほぼ五分と言ってよい内容で、これは特徴と言えないようだ。

しかし、別の特徴を調べてみると、「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」という両極端になり易い傾向が強うかがえることがわかった。

うち前者、「大きく動いた」際の典型例は一昨年の2023年。同年は年間を通して、なかなか大きな変動を記録しているが、なかでも2月相場の月間変動は8.82円で年間1位の動きを記録している。

その反面、「まったく動かない」年の典型は2022年。月間変動幅はわずか2.18円で、ダントツの年間最下位であり、最初のリード部分で取り上げた昨2024年2月も月間変動は5円にもとどかない4.98円と、やはり年間で最下位だった。

ちなみに、先の指摘でわかるように過去3年間の2月相場は年間の「月間最小変動」、「同最大変動」、「同最小変動」と極端な値動きが交互に起こっている。それをもとに4年目の今年は「順番からすると年間の月間最大変動」を期待する一のはさすがに我田引水すぎるだろうか。

一方、前記の2月相場が「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」という両極端の価格変動になり易い傾向は、必ずしもドル/円だけに限ったことでない、ということは頭に入れておいて損はない気がしている。

こちらはユーロ/円やポンド/円など、円絡みのほかの通貨ペア全般にみられる特徴。一例を挙げると、年間を通したドル/円の月間変動が「最下位」を記録した昨2024年のユーロ/円は月間変動5.6円で年間10位、ポンド/円も同じく10位の変動にとどまっていた。

最後に、カレンダー的な側面から2月の出来事を調べてみると、過去の2月は重要事象それも為替や金融に関することが多いようだ。

幾つか例を挙げると、「日本が新円へ切り替え(1946年)」、「ドル/円が変動相場制へ移行(1973年)」、「ドル安に歯止めをかけるルーブル合意(1987年)」、「G7声明で『ドル安は正終了』を宣言(1997年)」などのほか、比較的最近には「G7が『為替は市場で決定されるべき』との緊急共同声明を発表(2013年)」、「日本の長期金利が初めてマイナスに(2016年)」といった事象が起こっている。さらに、昨年2月には「日経平均株価がバブル期最高値を34年2ヵ月ぶりに更新した」ことも記憶に新しいだろう。

もちろん、こうした事象は毎年確実に起こるというものではない。しかし、たとえば暗号資産ビットコインがさらなる高値トライにより史上最高値の再更新や、為替市場でいうならユーロ/ドルが再びパリティ(1ユーロ=1ドル)割れ。2022年安値の0.9536ドルを下回る可能性なども取り沙汰されている。

また、それ以外でも先で軽く振れた「トランプ関税」の行方次第などによっては、様々な波乱の芽は存在している感を否めない。闇雲にただただ荒れた動きを願うわけではないが、それでもいまま少し変動をしていただきたいというのがホンネである。(了)

